

# 現行の『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌

加藤 いつみ

## I. はじめに

筆者は、明治期のカトリック信者が典礼の場で歌った聖歌に大変興味を持っていた。丁度そんな折り、帘功の論文「カトリックの典礼音楽の歴史と現状——聖歌集の変遷をめぐる——」（『礼拝と音楽』季刊18号）を読むチャンスに恵まれた。<sup>(註1)</sup>読み進むにつれ客観的な間違いを見いだした。彼は、明治期に出版された聖歌集『日本聖詠』（明治40年出版）について解説する中で、「この聖歌の中の数曲は現行の『カトリック聖歌集』にも残されており、今も歌いつがれている。」と書いている。<sup>(註2)</sup>そこで筆者は『日本聖詠』と『カトリック聖歌集』を一曲一曲照らし併せながら同じ旋律を持つ曲を探していった。見ていくうちに数曲どころか26曲をも見いだすことが出来た。中には旋律は同じでも、調子や拍子が変わってきている曲もあった。筆者が、大勢に影響の無い小さな事を問題にし始めたのは、ある論文の中に、既にこの間違いな記述が引用されていたからである。帘氏はどこから数曲という数を見いだしたのであろうか？

明治期の聖歌は、パリ外国宣教会の聖職者によってキリスト教と一緒に持ち込まれた。これらの曲は、中世の世俗曲やフランスの人が口ずさんだ歌や教会で歌った聖歌であったが、今日その元曲を見つける事はかなり難しい。筆者は偶然にも何曲かを掴むことができた。<sup>(註3)</sup>明治の人々は、キリスト教と歌という異文化を母体の文化との融合・変容を試みながら、それらをうまく自分の中に取り入れてきた。皆で声を合わせて、しかも西洋の歌を歌う経験の無かった一般の信者にとって聖歌の習得は努力と忍耐の要する作業であった。聖職者は、聖歌集を信者に持たせ、自分達はローマ字版と母国で刊行された楽譜付きフランス語の聖歌集を併用して、それぞれの歌詞に相当する旋律を歌って教えていった。

本稿は、明治の人々が教会という特殊な場所と条件の中でどんな歌を歌い、その歌がどのような聖歌集に歌い継がれ今日の『カトリック聖歌集』に残ってきたのか、残された歌はどんな特徴を持っているのか、について研究しようとするものである。これらの変遷を迎えることは、カトリック教会の聖歌の研究にのみ止まらず、明治期の音楽を音楽的・音楽史的に捉える上でも意味のあることと思われる。『カトリック聖歌集』を編集するにあたり「聖歌集改定委員会」の委員たちは、それ以前に使われていた聖歌集『公教聖歌集』（昭和8年出版）からよく歌われている曲とあまり歌われない曲をアンケート方式にて教会等の信者にただし、あまり歌われない曲をカットした。これらの過程を通してなお『カトリック聖歌集』に残った曲は、明治の人にも現代の人にも共通する好みの特徴をもっているのではなかろうか。そしてそこから日本人の音楽観を見出すことも可能ではなかろうか。

## Ⅱ．明治期のカトリック聖歌集

### 1．聖歌研究の現状

最近になって、聖歌・賛美歌に新しい傾向が生まれつつある。それは、洋楽史研究者の中村理平（1932-94）、フェリス女学院短期大学の手代木俊一、大阪英知大学の菅功、エリザベト音楽大学のエヴァルト・ヘンゼラー（Ewald Henseler）によるカトリック聖歌の書誌学的研究の発展である。中村は『キリスト教と日本の洋楽』<sup>(註4)</sup>において、十分に研究されていなかった明治のキリスト教音楽とその導入者に関する克明な史実を発掘し、学問的なアプローチを試みた。手代木はフェリス女学院短期大学音楽科研究図書室に保存されている聖歌集・賛美歌集に自分で発掘した何冊かの聖歌集を加えて「日本の教会音楽（讃美歌・聖歌）関係資料目録」<sup>(註5)</sup>を作成した。そしてさらに、明治期の日本ハリスト正教会、カトリック教会、プロテスタント教会の聖歌集・讃美歌集を発掘し、全42巻から成る『明治期讃美歌・聖歌集成』を出版した。<sup>(註6)</sup>彼は、この復刻版の中で13冊のカトリックの聖歌集を取り上げている。本稿は、彼の功績に全面的にあやかっている。またヘンゼラーは、カトリック聖歌を対象をしぼり、小さな論文まで徹底的に資料を収拾し「日本カトリック教会音楽総目録（稿）聖歌集・聖歌（1865-1968）」<sup>(註7)</sup>を発表している。キリスト教に関する多くの文献・史料を備えているフェリス女学院短期大学音楽科研究図書室、エリザベト音楽大学、上智大学の三木文庫、そしてオルチン文庫を擁する神戸女学院大学は、日本におけるキリスト教音楽研究のメッカとして、教会音楽研究者に計り知れない恩恵を与えている。最近の傾向として地方のキリスト教大学においても明治・大正・昭和の聖歌集がさかんに収拾され始め、それと同時に若い研究者も育ちつつある。<sup>(註8)</sup>

### 2．明治のカトリック聖歌集の種類とその特徴

江戸末期から明治にかけては、日本の歴史にとって大きな転換を迎えた時期であった。江戸幕府は開国を余儀なくされ、1858年（安政5年）フランス全権大使グロー男爵との間に「日仏修好条約」を、1860年（万延元年）アメリカ総領事ハリスとの間に「親和条約」を批准し、神奈川（横浜）・箱根・長崎・兵庫（神戸）新潟の五港を開港し、その地に外国人の居留を許し、教会建築を認めた。その外国人が教会での礼拝や死者のためのミサを挙げる必要性からバリエ外国宣教会は神父を派遣した。長崎においては、1863年ベルナード・プティジャン神父（B.T.Petitjean 1829-84）が派遣された。彼は、長崎天主堂（現在の大浦天主堂）の建築、外国人のための聖務、日本人の聖職者の養成、信者の保護・救済など積極的に布教活動に努めた。<sup>(註9)</sup>そして彼は、明治最初の聖歌集『きりしたんのうたひ』を出版した。

教会でのミサにおいて、歌は大きな役割を担っている。歌は信者にとって神への賛美・愛・信仰の表現であり、声を出して歌うことにより個々の気持ちを爽快に導き、信仰を深め、共同体の心を一つに結びつける。そこで各教会は競って独自の聖歌集の編集、出版を始めた。これらの聖歌集には、キリスト教の揺籃期において各教会が必要性に迫られてその編纂を模索しながら作っていった跡が伺える。手代木によれば、明治期には13冊ばかりではなく、それ以上の聖歌集が存

在した。しかし大戦中に焼けたり、整理されてしまったり、又所持していても公開することを拒む教会もあるという。

帘功は「カトリックの典礼音楽の歴史と現状」の中で、明治初期から現代までのカトリック聖歌集の編集・出版・普及の変遷からその歩みを四期に分類している。<sup>(註10)</sup> 第1期は初期聖歌集普及期（明治初頭- 昭和初頭）、第2期は統一聖歌集普及期（昭和初頭- 戦後以降）、第3期は改定聖歌普及期（昭和41年以降）、第4期は典礼聖歌普及期（第二バチカン公会議 1962-65年以降）である。第一期は各教会が独自の聖歌集を編集・出版した時期、第二期は始めて全国共通の聖歌集『公教聖歌集』（昭和8年）が出版された時期、第三期は『カトリック聖歌集』（昭和41年）が出版され全国的に非常に普及し安定した時期、第四期は第二バチカン公会議の典礼憲章公布、すなわち典礼刷新以降出版された『典礼聖歌集』（昭和43年）の時期である。

本稿は、第一期の明治期の聖歌集と第三期の改定聖歌集『カトリック聖歌集』に焦点を絞る。明治期の聖歌は、『公教聖歌集』を経て『カトリック聖歌集』の中へ受け継がれた。しかしそれ以降出版された『典礼聖歌集』へは全く継続されなかった。『典礼聖歌集』は、典礼憲章の第6章「教会音楽」を実践に移す上での具体的方向を示すために出された指針をうけて、日本語による創作が試みられた。<sup>(註11)</sup> 神聖なる務めが歌とともに盛儀をもって遂行されるために、聖職奉仕者と信者が一緒にミサに参加できるように式次第は全て日本語によって行われた。そして聖歌は、グレゴリオ聖歌の精神と伝統に基づいて、聖書の詩篇を歌詞として用い、邦語で日本人の音楽家によって作曲された。それ故に『カトリック聖歌集』は、新旧交代の狭間にあり、明治期のカトリック精神を残す最後の宝庫といえることができる。

明治期の13冊の聖歌集は、邦語版、日本語のローマ字版、ラテン語のカタカナ版、五線譜になっているもの等、多種多様である。表1. に聖歌集を刊行年代順に一覧し、聖歌集名、編者、出版所、発行年、その内容について示した。

〔表1. 明治期に出版されたカトリック聖歌集〕

	聖歌集名	編者	出版所	発行年	内容
1	きりしたんのうたひ	ブティジャン	長崎天主堂	1879 (明12)	歌詞のみ
2	手書き歌詞集	サルモン	長崎・黒崎教会	1880 (明13)	歌詞のみ
3	聖詠 (完)	ルマレシヤル	北緯日本聖會	1883 (明16)	歌詞のみ
4	Recueil de Cantiques Japonais Avec musique	ルマレシヤル	北緯日本聖會	1883 (明16)	楽譜付き

5	天主教教会拉丁聖歌	菅 克家	北緯中央公教會	1886（明19）	歌詞のみ
6	聖詠（完）	ルマレシャル	北緯日本聖會	1889（明22）	歌詞のみ
7	聖詠（完）	ルマレシャル	北緯日本聖會	1893（明26）	歌詞のみ
8	Cantus Sacri ad usum Alumnorum Seminarii Nagasakiensis		長崎セミナリオン	1896（明29）	楽譜付
9	公教會羅旬歌集	ラゲ	三才社，昌平館	1903（明36）	歌詞のみ
10	公教會羅旬歌集	ルマレシャル	勝浦長保	1906（明39）	歌詞のみ
11	日本聖詠 バビノ 伴奏付	ルマレシャル	三才社	1907（明40）	楽譜付き
12	天主教教会聖歌	マルモニエ	大阪聖若瑟教育院	1910（明43）	楽譜付き
13	公教聖歌	ド・マンジエール	玫瑰塾	1911（明44）	楽譜付き

上記の聖歌集は、使用されている文体・文字表記・スタイルそして楽譜の有無によって次の四種類に分類する事ができる。

① 長崎地方の方言を加えて伝えられたオラシヨの伝統を引く聖歌集。

これに属するのは『きりしたんのうたひ』『手書き歌詞集』であり、これら2冊の聖歌集は、長崎にある天主堂で編纂された文字だけの聖歌集である。『きりしたんのうたひ』は、明治期において編纂された最初の聖歌集で、祈り文『オラシヨ並ニヲシエ』<sup>(註12)</sup>の付録として出版された。全51曲中、41曲はこの地方の訛りを加えて伝えられたオラシヨの伝統を引く文体で、他の10曲は、グレゴリオ聖歌のひらがな版である。歌い方について簡単な指示があるのみで客観性が乏しいため、音の再現は難しい。<sup>(註13)</sup>『手書き歌詞集』は、ローマ字の筆記体で書かれた30曲が歌詞のみで入っている。日本語のローマ字版の聖歌集であるところから、日本に滞在した聖職者が使用したものと考えられる。

② 日本語をローマ字、カタカナ、ひらがなで文字表記し、純日本調の和歌のスタイルを持つ聖歌集。

『聖詠』の明治16年・22年・26年版がこれに属する。フランス外国宣教会のルマレシャル神父（Lemarchal 1842-1912）の編纂による一連の『聖詠』は、歌詞のみの聖歌集で、歌詞の文体は7ー5調の純和歌のスタイルをとり、<sup>(註14)</sup> その歌詞の中には「久方の」「雨降る」「たらちね」「玉

の緒」「空蟬」等の枕詞が頻繁に用いられている。16年版の「聖詠」は29曲、22年版は74曲、26年版は154曲と前の聖歌集の曲を踏襲しながら、新たな曲を追加し、そして難解な文語の歌詞を口語調に改めている。

③ グレゴリオ聖歌をカタカナ表記した聖歌集。

菅克家の『天主公会拉丁聖歌集』、ラゲ (Emile Raguet, 1854-1929) の『公会拉丁聖歌集』とルマレシャルの『公会拉丁聖歌集』がこれに属する。この三冊の聖歌集は、グレゴリオ聖歌をカタカナ表記した聖歌集で、五線譜化はされていない。三冊の中には、ミサの通常文であるキリエレーソン、グローリア、クレド、サンクトゥス、アニュス・デイが見られることから、ミサで歌われるグレゴリオ聖歌の邦語版である。

④ 1冊の中にグレゴリオ聖歌、フランス語の歌、日本語の歌がミックスされ、それらが楽譜化されている聖歌集

『Recueil de Cantiques Japonais Avec musique』(以下「Recueil」と略記)、『Cantus Sacri ad usum Alumnorum Seminarii Nagasakiensis』(以下「Nagasaki」と略記)『日本聖詠』『天主公会聖歌』『公教聖歌』の五冊がこれに属する。

『Recueil』は、ルマレシャル神父によって出版された『聖詠(16年版)』を楽譜化したものであり、邦語聖歌が27曲収められている。単旋律の楽譜の下に日本語のローマ字表記した歌詞がつけられている。譜面は手書き印刷であるが、鮮明であるのでローマ字に慣れれば歌うことはできる。『Recueil』と『聖詠(16年版)』は和洋一対の聖歌集であり、前者は外国人の神父用、後者は日本人の信者用である。神父は邦語版の聖歌集を信者に持たせ、自分たちはローマ字版の聖歌集を用い、それぞれの歌詞に相当する旋律を教え、そして祈りの場で共に斉唱したと考えられる。

『Nagasaki』は長崎の神学生のために編纂された聖歌集である。楽譜化された聖歌集であり、ラテン語表記の聖歌、グレゴリオ聖歌、カタカナ表記の邦語聖歌の3種類、全244ページから成っている。ラテン語表記の曲の中には、モーツァルト、ベートーヴェン、メンデルスゾーンといった作曲者名が表記されている。グレゴリオ聖歌の部分では、ネウマ譜とラテン語の歌詞のついた曲があり、そして最後の部分にカタカナの歌詞がついた邦語聖歌が37曲収められている。この邦語聖歌の部分において、ルマレシャル神父編の『Recueil』から8曲受け継いでいる。そしてこの聖歌集の多くの曲は『カトリック聖歌集』に受け継がれていった。100年余の歳月を経ながらも、なお人々に歌い継がれた多くの曲を網羅している『Nagasaki』は、聖歌集の原点として大きな意義があるように思われる。

『日本聖詠』は、ルマレシャル神父編の一連の『聖詠』を楽譜化したものである。タイトル、歌詞はすべてローマ字表記で、155曲が収められている。左ページに曲、右ページにはパピノ神父 (J.E.J.Papinot 1860-1942) の編曲によるオルガン伴奏譜が付いている。この聖歌集は、一般の信者用というよりは、むしろオルガニスト、合唱隊が用いたものであろう。明治期の聖歌集としては、一応の完成された作品と見なすことができる。

『天主公会聖歌集』は、明治43年(1910) マルモニュ神父 (Marmonier 1876-1933) の編纂に

より大阪聖若瑟教育院で出版された。左表紙からグレゴリオ聖歌を主とするラテン語聖歌そして邦語聖歌50曲が収まり、右表紙から祈禱文と公教心理が述べられている聖歌と教理の両面を兼ね備えた聖歌集である。邦語の聖歌は、全て単旋律から成り、ひらがなの歌詞がつけられている。

『公教聖歌集』は、明治44年（1911）ドマンジェル（Demangel 1868-1929）によって東京大司教館内にあった玫瑰（まいかい）塾から、同塾生のために出版された聖歌集である。その内容は、第1部ラテン語聖歌、第2部フランス語聖歌、第3部邦語聖歌、第4部補遺となっている。邦語聖歌は19曲収められている。

以上、13冊の聖歌集についてその体裁を述べてきた。しかしこれらの中で『カトリック聖歌集』に受け継がれた聖歌集は『Recueil』『Nagasaki』『日本聖詠』の3冊である。

### Ⅲ.『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌

#### 1.『カトリック聖歌集』の成立

カトリック教会は、全国統一の聖歌集『公教聖歌集』を昭和8年に出版した。全国統一聖歌集の普及により、教会に安定と繁栄という大きなメリットをもたらした。しかし時が過ぎるにつれて、多くの問題点、特に難解なことば、音の抑揚とことばのアクセントの不一致などの指摘がされ始めた。そこで司教協議会では昭和31年、当時の京都司教古屋義之を委員長とする「聖歌集改定委員会」を組織し、新しい聖歌集の検討に乗り出した。1回目のエリザベト音楽大学での会議において、改定に当たり聖職者のみならず各方面の人材に協力を求める事、『公教聖歌集』を実際使用している施設に意向をたずねる事、信者、一般人に新しい邦語聖歌を募集する事、グレゴリオ聖歌を日本人の作曲したラテン語聖歌に差し変える事等、が話し合われた。その結果、古屋京都司教（委員長）、エルネスト・ゴーセン（エリザベト音楽大学長）、エウゼビウス・ブライトン（光明社）等の聖職者以外に野村良雄、高田三郎、山本直忠の音楽家グループと影山準吉、村田利明、大木淳の国文学者グループが加えられた。委員会は全国の教会・学校・修道院に1224通のアンケート用紙を送り、『公教聖歌集』の中でよく歌われる歌、あまり歌われない歌の現状や聖歌改定に関する意見や希望などについて尋ねた。その結果を受けて、よく歌われる曲は残し<sup>(注15)</sup>、余り歌われない曲がカットされた。<sup>(注16)</sup>その他にも委員会は50数曲をカットし、新たに60数曲を加えた。<sup>(注17)</sup>さらにグレゴリオ聖歌をカットして山本直忠のラテン語のミサ曲「キリエレイソン、グローリア、クレド、サンクトゥス、アニュス・デイ」が入れられた。そしてさらにプロテスタント教会の讃美歌をその歌詞を変えて取り入れ、324曲からなる聖歌集が完成した。この聖歌集は、昭和41年のクリスマスに間に合わせて初版2万部が発行された。

#### 2. 現行の『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌

『カトリック聖歌集』は、26曲の明治期の聖歌を受け継いだ。そのうち『Recueil』から5曲、『Nagasaki』から16曲、『日本聖詠』から26曲である。

表2は、『Recueil』『Nagasaki』『日本聖詠』『カトリック聖歌集』を出版年度順に並べ、それぞ

れに共通している曲にその曲名を記した。そして『カトリック聖歌集』が受け継いだ曲には資料番号を添えた。

〔表 2、4 冊の聖歌集に共通している曲とその曲名〕

『Recueil』 (1883年)	『Nagasaki』 (1896年)	『日本聖詠』 (1907年)	『カトリック聖歌集』 (1966年)	資料 番号
P. 1 聖神を祈る歌	P.191 聖神を祈る事 P.191 聖神を祈る事 P.193 大主教 P.194 聖母經	No. 1 聖神を祈る No. 1 聖神を祈る No. 5 主禱文 No. 6 天使祝し	No.226 きたりませ  No.335 アヴェ・マリア ) * No.471 みせつりの	No. 1  No. 2 No. 3
P.18 天主十戒	P.194 天主十戒 P.195 聖會の六戒   P.197 物に準ひ悟ること  P.198 助りの歌 P.203 御誕生の前ノ歌 P.205 御誕生の事 P.206 御誕生の事 P.207 御誕生の事 P.211 耶穌の恵みの歌 P.213 御復活の歌  P.214 聖体を受ける歌	No. 7 天使祝し No. 9 天主十戒 No. 10 聖會の十戒 No. 11 信望愛經 No. 18 天主の恵み No. 20 物に準え悟ること No. 22 靈魂の助かり No. 23 靈魂の助かり No. 46 御誕生の前 No. 48 御主の御誕生 No. 50 御主の御誕生 No. 51 御主の御誕生 No. 56 イエズスの恵み No. 61 御主の御復活 No. 62 イエズスのご昇天 No. 63 聖靈の降臨 No. 79 聖体拝領	No.334 きよきおとめとて    No. 4 神のさとしの No. 12 われ神をほめ  No.162 主のもとに  No.103 あわれみの神 No.122 地にも空にも No.121 あめのみつかいの) No.608 あめのみつかいの) No.117 神のひとり子  No.204 よろこべ今日ぞ No.217 すみわたる No.227 みそらはるか No. 70 愛の主よ	No. 4    No. 5 No. 6  No. 7  No. 8 No. 9 No.10 No.11 No.12  No.13 No.14 No.15 No.16
P. 5 彌撒聖祭の歌	P.215 彌撒聖祭の歌	No. 75 ミサ聖祭	No. 68 いけにえを	No.17
P.27 聖母聖月の歌	P.216 聖母聖月の歌	No. 92 聖母聖月  No.101 聖母の悲しみ	No.354 たのしくも  No.482 わたしのむね	No.18  No.19
P.18 罪科の汚なく孕 みたもう皇后	P.217 罪科の汚なく孕 みたもう皇后	No.109 げん罪の汚れな き母	No.332 けがれなく	No.20
P.26 聖母に願う歌	P.218 聖母に願う歌 P.219 天の皇后の歌  P.220 亜物海の星の歌	P.111 聖母に願う No.126 天の元后  No.116 海の星	P.484 マリアさま  No.314 あめなるきさきの) No.618 あめなるきさきの) No.322 あめのきさき	No.21  No.22 No.23 No.24

	P.222 勤終て後唱る歌	No.132 勤を終わ後		
	P.222 耶穌マリア ジ ョセフに向かう 歌	P.134 イエス マリア ジ ョセフに向かう		
	P.223 聖若瑟の誉れ	No.141 聖ジョセフを誉 めあげる	No.393 み神はみずからの	No.25
	P.225 聖ミカエルの祝 日の歌	No.142 聖ミカエルの祝 日の歌		
	P.226 諸聖人の祝日の歌	P.145 諸聖人の祝日の歌	No.432 われらたたえん	No.26
	P.228 死人のための	No.153 死人のため		
P. 6 天降り後の歌	P.230 天降り後の歌			
P. 9 死ぬること	P.230 死ぬること			

(＊旋律の同じ曲を括弧で記した)

明治の聖歌は、上記のような変遷を辿り『カトリック聖歌集』に受け継がれた。明治期の3冊の聖歌集は、曲名や曲順は殆ど変わることなく踏襲されている。しかし『カトリック聖歌集』においては、全く別のタイトルが付けられ、しかも曲順がすっかり変わっている。その上、同じ曲を「NO.335 アヴェ・マリア」と「NO.471 みせつりの」、「NO.121とNO.608のあめのみつかい」、「NO.314とNO.618のあめなるきさきの」のように2回用いている。

では、受け継がれた26曲は、どんな曲趣を持っているのであろうか。以下、表3に『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌を、表2に示した資料番号に沿って挙げていく。



表3.『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌

NO. 1

226 き たり ま せ 聖 霊

♩=100 おりがえし

きたーりませ せいーなるみたま  
てらしませ しりのひーかーり  
まもりませ あいのみーたーま  
1. みあるじをしたいまつるもやまー  
じはけーわーしあえーぎてのーぼーる  
よわきわれをつよめたーまーえ

NO. 3

結 婚 み せ つ り の 471

♩=54 おりがえし

みーせつりのくしきみちびき  
いーつくしーみふかきみははよ  
あーいともーにたすけいたわり  
めでたかりいもせをちぎる  
せいマリアまもらせたまえ  
みあるじのみむねのまきに  
きょうのよろこび  
いくちよかけて  
よきひおくらん

NO. 5

4 神のさとしの 信望愛

♩=76

かみのさとしのみむねかしこみて  
2. ちのめぐみのみずはあふれたり  
3. あいのみあるじこころひとすじに  
とわにたがわじとわれはひたすら  
みかみのまもりととわのいのちを  
われらまなびつつかみをあいて  
しんじまつらんよのおわりまで  
のぞみまつらんいつのひまでも  
ひとをあいせんわがみのごとく

NO. 2

天使祝詞 アヴェ・マリア 335

♩=48

1. アーヴマリーア みめぐみみてる  
2. かーみのはーは つみびとのため  
主ともたますおみなのおみな  
いのりたまえとりなしたまえ  
しゅくせられたもろ  
いまもいまも

NO. 4

334 (620) きよきおとめとて 天使祝詞

♩=96

1. きよきおとめとて おみなのうちより  
2. やどりたまいーしはよをあがなうーかみ  
えーらばれたーまい みははとなりーたもろ  
はーろびゆーくみをすくいたまいーけり  
めーでたしマリーア めーぐみみちみてり  
いーまもいーまーおも いーのりたまーえよ

NO. 6

12 われ神をほめ テ・デウム

♩=76

1. われかーみをほめ 主とぞーたたまえす  
2. せいなーるせいたる せいたるみかみよ  
3. とうとーきみでしは ほまれーのしうせいし  
4. ちみーこみーたま さんにましませど  
5. きよきーをもーとめ あしきーをしりぞけ  
6. てんにーおいーは みかみーにえいこう  
とわのーみちーちを あめつーちととも  
よるずーのたーみを ひきいーたもろが主  
いのちーさーげし すべてーのじんきうし  
ひとりーのみーかみ よをすーくわんため  
主はまーたきーたり このよーさばきたもろ  
ちにあーるわーれら なにをーほこさべき  
みつ かいうとうケルビーム のーうた  
あめつ ちにみつ わのーさかーえと  
かみのみまえにきそいーうたーえば  
おとめやどりくろいーみしーのびい  
主よおんちもてあがなーいたーまい  
あわれみたまえ主 にーよりたーのむ  
セラフィム のうたたまゆるーひまーなし  
さけぶそこのえみそいーにかーえむく  
はかりつぎにせぬみんにかーぼーりぬ  
死につみにかちてんにかーえーかし  
みくにのうちにいたまーえーかし  
われらのぞみとわにーかーわーらじ

## NO. 7

## 162 主のもとに 悔 俊

♩=44 おりかえし

主-のもと-に かけよ-る-われを  
あ-われみ-で さとしみ-ちびく  
いのちの-ことば 1. つみを お-かし-  
2. へりく-だ-りて-  
3. そむく-ま-じと-  
主-を かたし-ます- よわきわ-れに-  
み-もとに-げく- た-われのう-えに-  
ち-かいこ-もな-お- そむくわ-れを-  
た-ちかえ-り-の-ち-からを-た-さえ-  
主-のあ-れ-みを-た-れさ-せ-た-さえ-  
あ-われと お-もい-す-て-た-まわ-ざれ-

## NO. 8

## 103 あわれみの神 (A) 待 降 節

♩=56 (おりかえし)

あわれみの かみとくきたりたまえ  
われらはみなむかえま一つらん  
すくいのみこ 1. はてし-なき-  
2. みこと-ばは-  
3. よのな-やみ-  
た-びじに-まて-うす-よのひ-とを-  
や-みじを-てら-うす-とこし-えの-  
みく-に-みちびく-みすくい-なれ-  
かが-きわ-る-よき-まら-  
なく-さめた-まわる-さちのひ-なれ-

## NO. 9

## 122 地にも空にも 聖 誕

♩=108 おりかえし

ちにもそ-らにもか-ね-なり-わたる  
すべての-ひとよよろこび-うたえ  
1. わかし-の-ひとつたえに-たがわ-ず  
2. やさしい-みこは-みめぐみ-あふ-れて  
3. まずしい-うまや-ほし-くさ-のう-えに-  
かみのひ-とりごきょう-うま-れたも-  
あいのま-なざし-ほほえ-ま-せ-たも-  
とうとい-みこは-あま-く-だ-り-たも-

## NO. 10

## 聖 誕 あめのみつかいの 121 (608)

♩=92

1. あめ-のみ-つかいのうた-ごえ-ひびく  
2. まずしい-うまやのめぐみ-のみこに  
3. やさしい-おきなごすくい-のみこよ  
ほし-かけ-さやかなまき-ばの-そらに  
ほめ-うた-ささげてよろこび-うたう  
みく-にを-のぞみてみま-えに-いのる  
おりかえし  
グロ - - - - - リア イン・エグザ・シス・デ オ デ - オ -

## NO. 11

## 608 (121) あめのみつかいの 聖 誕

♩=92

1. { あめ-のみ-つかいのうた-ごえ-ひびく }, { ほし-かけ-さやかなまき-ばの-そらに },  
2. { まずしい-うまやのめぐみ-のみこに }, { ほめ-うた-ささげてよろこび-うたう },  
3. { やさしい-おきなごすくい-のみこよ }, { みく-にを-のぞみてみま-えに-いのる },  
グロ - - - - - リア  
イン・エグザ・シス・デ オ デ - オ -

## NO. 12

## 聖 誕 神のひとり子 117

♩=54

1. かみのひとりごくだりたまいに  
われらとともによにすみたも  
あめのみ-つかいひがしのはかせ  
われひととによろこびうたわ  
このうれしきひを-

NO.13

## 復活 よろこべ今日ぞ 204 (610)

♩=88

1. よろこべきょうぞ わがきみは死にか  
ちたまえりよろこべきょうぞ 主は  
よみがえりたもう 世のひとのつみ  
とがをあがないてみゆるしたもうくる  
しみのぎまししくいぬしこそきみ

NO.15

## 聖霊 みそらはるか 227

♩=88 おりがえし

みそらは一はるかみく-にをさして ころお  
どりいさみたつたびじのかてと ななつの  
たまものたもう せいいいきませ  
1. しかのた-に-がわしたうがご-とく  
2. あつきひ-ざ-しのやまじのこ-か-げ  
3. ひはくれ-は-ててよみちほく-ら-し  
わがかわくとき のき-よ-きま-し-み-ず  
わがいこうとき にふ-く-すず-かぜ-よ  
わがまようとき のみ-ち-びき-のひ-よ

NO.17

68 いけにえを 入祭唱から  
聖讃音まで

♩=66

1. いけにえを さ-さ-けて-いのる  
2. おがために い-さ-の-ちう-ちすて  
3. いつのひも さ-さ-ぐる-ミサに  
4. じゅうじかの き-よ-きい-けにえ  
みあるじの み-な-は-か-おりて  
あがないの め-ぐ-み-た-まわ  
わがつみを ゆる-す-み-むねの  
よにつぎに た-え-せ-ぬ-ミサの  
よ-よ-に-か-わ-ら-じ  
い-け-に-え-ぞ-よ-き  
い-と-も-と-う-と-き  
い-と-も-か-し-こ-き

NO.14

## 217 すみわたる 昇天

♩=96 おりがえし

すみわたる みそら-の-か-な-た  
の-ぼり-ゆ-く-び-く-え-か-が-や-く-  
とるときみす-が-た 1. 主-を-し-た-う  
2. た-の-も-し-く  
3. い-つ-の-ひ-か  
ひとのころ-に-み-お-し-え-を  
われしんぜい-と-せ-い-れい-の-  
めさるるわれ-を-み-も-と-へ-と  
ふかくきさみ-て あま-つ-み-く-に-へ  
やくそくのこ-し あま-つ-み-く-に-へ  
むかえたまえ-や あま-つ-み-く-に-へ

NO.16

## 70 愛の主よ 聖変化後

♩=48

1. あいの主-よ-い-ま-ぞ-き-たり-て  
2. わが-か-み-よ-い-や-し-き-われ-に  
3. みある-じ-よ-い-ま-わ-の-か-た-み  
わがよ-わ-き-こ-ろ-つ-よ-め-  
みすが-た-は-に-は-み-え-ね-  
うけま-つ-る-こ-の-ホ-ス-ア-  
みま-え-に-み-ち-び-き-ま-せ-  
ひた-す-ら-し-ん-じ-ま-つ-る-  
ひと-え-に-あ-い-し-ま-つ-る-  
おりがえし  
主よイエズスよ きよきめぐみに  
いく-た-び-も-そ-む-き-し-わ-れ-を-  
みち-ち-の-て-に-か-え-し-た-ま-え-よ

NO.18

## 354 たのしくも 聖母月

♩=50 おりがえし

たのしくもま-つるさ-つ-きのほぎうたよ  
し-ら-べ-さ-や-か-に-あ-め-に-ひ-び-け-よ  
1. みそらに-は-み-つ-か-い-う-たい-ゆ-き-か-い-て  
2. みどりのに-う-る-わ-し-み-は-は-ち-ま-せ-ば-て  
3. けがれな-き-み-は-は-の-こ-ろ-き-ぬ-に-み-て  
4. みははこそわ-が-した-わ-し-き-は-は-な-れ-ば  
み-た-み-の-は-は-を-た-た-え-あ-う-な-り  
ち-ぐ-さ-な-び-き-て-あ-み-を-あ-お-が-ん  
よ-そ-お-い-た-し-や-わ-が-こ-こ-ろ-に-も  
い-の-ち-の-い-ず-み-く-み-て-つ-き-せ-じ

## NO.19

## 聖体拝領(小児) わたしのむね 482

♩=84 かんし

わたしのむねにきてちょうだい

いづもなつかし イエズさま

1. しろいホスチア イエズさま  
2. ここのおうち かみさまの  
3. わたしのこころ おりに  
4. さみしいときも はなれずに

なつかしうれし いadakimasu  
いづもおいでのおうちですーね  
わるくなります おしてちょうだい  
わたしのそばに いてちょうだい

## NO.20

## 332 けがれなく 無原罪の聖母

♩=48 おりかえし

けがれなくうまれしめぐみめでたかり

きよしうるわしかみのみはは

1. おとめにてすくいぬしのみははたり  
2. うるわしくききにおいぬるゆりのはな  
3. いづくしみふかきみははとよのひとは

かみのみわざのくしきみめぐみ  
おとめマリアのよそおいにこそ  
したいまつりていのりさぐる

## NO.21

## 聖母(小児) マリアさま 484

♩=64 おりかえし

マリアさまおてあわせていつのひも

わたしのためにいのりくださる

1. おきるからやすむときまでーちちはの  
2. めがさめてイエズスマリアーヨゼフさま

みこころにそいよいこであれと  
まもりたまえといのるようと

## NO.22

## 聖母 あめなるきさきの 314 (618)

♩=92

あめなるきさきのみはは

2. みつかいこぞりてきよき

マリアしたわしちにては  
みなをたたえつあさな

くるしみあめにては  
ゆるしなみうたをさ

さかゆゆかしきそーのみな  
さけてみそばよはなれず

## NO.23

## 618 (314) あめなるきさきの 聖母

♩=92

あめなるきさきのみはは

2. みつかいこぞりてきよき

3. なみだのこたにまきみはは

4. なみだをたたえつみそ

5. あぞみはみそらのみけの

マリアしたわしちにては  
みなりたえつあさな

マシしたよかやきあみさ  
はしとかがやきあみさ

くるしみあめにては  
ゆるしなみうたをさ

ゆめとめいなるこびし  
そおぎてみはよな

ゆかしきそーのみな  
そばよはなれず

みのそなわしいなます  
みそぞみはいやが

## NO.24

## 322 (621) あめのきさき ルルドの聖母\*)

♩=92

あめのきさきてんのもーん

2. ゆりのはなとけだかくーも

3. くすしきバラかくわしーく

うみのほしとかがやきます  
さきいでにきよきマリア

めぐみたもうあいのみはは

アヴェアヴェアヴェマリア

アヴェアヴェアヴェマリーア

## 聖ヨゼフ み神はみずからの 393

*♩=92*

1. み か み は み ず か ら の み ま も り に か え て  
 2. あ め な る み あ る じ ー は み こ の お ん は は を  
 3. い と き よ き ヨ ゼ フ ー は か み の み は は な る

い つ く し イェズ ス ー を ヨ ゼ フ に ゆ だ な ね た り  
 た す け ま も る た め に ヨ ゼ フ を え ら み た り  
 マ リ ア の じ ょ う は い と あ げ ら れ た ま い た り

*おりかえし*

と う と き み こ イェズ ス け た か き み は は を

ま も り し せ い ヨ ゼ フ よ わ れ ら を も ま も れ

ま も り し せ い ヨ ゼ フ よ わ れ ら を も ま も れ

## 432 われらたたえん 諸聖人

*♩=88* *おりかえし*

わ れ ら た た え ん あ ま つ み く に の

い さ お し た か き ひ じ り の み な を

こ え た か ら ー に 1. 主 の み ー む ね  
 2. う つ し ー よ の

か し こ み う け て お お し ー く も  
 ほ ま れ も と み も む な し ー き と

み お し え の た め い の ち を さ さ ぐ  
 ひ た す ら は げ む わ が 主 の み ち を

#### Ⅳ.『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌の特徴

『カトリック聖歌集』に残された明治期の聖歌26曲の旋律には共通する特徴が見られる。聖歌を歌詞のもつ意味を除いて旋律面だけからその全容を語ろうとするのはいささか無謀かもしれない。しかし、聖歌として歌われ、今日まで歌い継がれた曲には元々聖歌と成りうる要素を兼ね備えている。明治初期の聖職者は、聖歌集の編集に当たり、曲の歌詞を聖書の詩篇から取り出し、それを7―5調の和歌のスタイルに置き換えようと試みた。また選曲にあたっては、グレゴリオ聖歌の節の動きを根底に置き、その再現にふさわしい曲を聖歌として選びだしたからである。以下、その旋律の全般的な特徴について述べてみよう。

1. 全てが単旋律の曲である。
2. 旋律が順次進行しており、リズムパターンも滑らかである。

下記の3つの例に見られるようにいずれも動きが順次的で滑らかである。

例1      **70**                  愛 の 主 よ                  聖変化後

*♩=48*

例2      **354**                  た の し く も                  聖母月

*♩=50 おりやえし*

例3      聖 誕                  神 の ひ と り 子                  **117**

*♩=51*

3. 歌詞は一音に一文字が当てはめられている。
4. 26曲全てが長音階で明るい曲が多い。
5. へ長調の曲が多い

26曲中17曲がへ長調の曲である。

6. 三拍子・六拍子の曲が多い。

26曲中三拍子の曲は8曲、六拍子の曲が8曲ある。3拍子・6拍子の曲が多いため、全体が流れるようにスイングしている曲が多い。

例1      聖体拝領(小児)                  わ た し の む ね                  **482**

*♩=84*

例2      聖母(小児)                  マ リ ア さ ま                  **484**

*♩=84 おりやえし*

例3      結 婚                  み せ つ り の                  **471**

*♩=54*

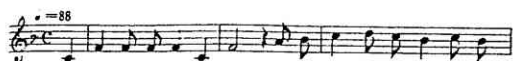
7. アウフタクトで始まる曲が多い。

26曲中11曲はアウフタクトの曲である。

8. アウフタクトで始まり、開始音がソそして4度上のドに進むパターンが多い。

下の3つの例のようにソ〜ド（4度上）に進行する曲が13曲ある。

例1 復活 よろこべ今日ぞ 204 (610)



例2 432 われらたたえん 諸聖人



例3 322 (621) あめのきさき ルルドの聖母\*)



以上『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治の聖歌26曲について、その音楽がもっている旋律的な特徴について述べてきた。この26曲は既に述べたように、日本人によって作曲された曲ではなく、明治の初期パリ外国宣教会の聖職者によって持ち込まれた。元歌の分かっている曲もあるが大半は掴めていない。これらの歌を歌った明治の人々は、異文化に接して戸惑い、正しい音程やリズムで歌うことは難しかったであろう。しかし西洋音楽が日常生活に入り込み、音楽を聴いたり、楽譜を読んだりできる環境にある現在においては、聖歌はそれ程難しい歌ではなく、多くの人が自然に受け入れ、快く歌ってゆける部類の歌である。テンポが軽快で速く、それにリズムが複雑に絡み、激しい動作を伴う音楽に馴染んでしまっている我々の耳には、むしろ乙女の持つ清らかさと新鮮すら感じる。フランスから伝わった歌であろうと、元歌がどこで生まれようと、これらの聖歌は日本に溶け込んで我々の生活の中に入ってしまった。明るく、順次的進行で滑らかで、たゆとうようにスイングして、旋律が流れるような美しい動きをもつ明治期の聖歌は、ゲランジュ師の提唱するソレーム唱法<sup>(注1)</sup>によるグレゴリオ聖歌に共通する点を持ち合わせているように思われる。明治期の聖歌は、まさにグレゴリオ聖歌の日本版と言ってもおかしくはない。日本人は、このような性格を持った歌にノスタルジアの感情を呼び起こされ、精神的な安定と心の豊かさにつながる何かを見い出すのではなからうか。

(注1) 日本基督教団出版局 1978年 P.22-27

(注2) 当論文のP.23

(注3) 筆者が見つけることが出来た元曲は「N0.335 アヴェ・マリア」「N0.471 みせつりの」は中世に歌われ「Song of the Ass」。「N0.122 地にも空にも」は「Il est ne」。「N0.482 わたしのむね」は「Vamos todos a Belen」である。

(注4) 大空社 1996年

(注5) フェリス女学院短期大学音楽科研究図書室 平成元年

- (注6) 大空社 この聖歌集は、第1巻—5巻は日本ハリストス正教会、第6巻—11巻はカトリック教会、第12—42巻はプロテスタント諸派教会となっている。大空社1996年
- (注7) 私家版 平成2年
- (注8) 南山大学カトリック文庫通信N0.3 1995『『カトリック文庫』資料紹介』栗山義久
- (注9) 「浦上四番崩れ」と呼ばれる事件で、天主堂建立後、1867年7月潜伏キリシタンがブティジャン神父に信仰を告白したことにより、キリシタン発覚の発端になり2年間に3000名の信者が逮捕され、厳しい刑に処された。
- (注10) 前掲書『礼拝と音楽』P.22
- (注11) 第6章教会音楽の第113条、第119条
- (注12) 1878年ド・ロ神父によって編著された(推定)和紙和装本で、カトリックの祈禱書 その内容は、「ありがたみのおらしょ」「ねがいのおらしょ」「のぞみのおらしょ」等祈禱文が書かれている。
- (注13) 歌詞の左右に傍線(一)を付け「—この しるしが もじの みぎに ある ところには うへの じをよく いひだし、 したの じを はんぶん ばかり いひだす べし ——— P.41」と、奏法についての説明文が添えられている。
- (注14) 帝国大学で日本語学、比較博言学を担当していたイギリス人、B.H.チェンバレン (Chamberlain 1850-1939) は『Suggestion for a Japanese Rendering of the Psalms』(1880) の論文の中で「詩篇の如き詩文学の翻訳は特に万葉調によるべきである。」提唱し、みずから詩篇の試訳をあげている。当時の聖歌集を作成するに当たり編者は、チェンバレンの学説を取り入れ、その歌詞を万葉調のスタイルで書き表したのかもしれない。
- (注15) N0.248, N0.2, N0.11, N0.267, N0246等10曲 (アンケート順)
- (注16) N0.41, N03, N07, N0.16, N017等10曲 (アンケート順)
- (注17) その中には、春日井市在住の信者の歌「481.おめめつむれば」等も含まれる。
- (注18) フランスのサルト県ソレーム村にあるベネディクト会のピエール修道院では、ゲランジェ師を中心にグレゴリオ聖歌の歌唱法と復興に大きな貢献をした。

#### 参考文献

- ・中村理平著『キリスト教と日本の洋楽』 大空社 1996年
- ・中村理平著『洋楽導入者の軌跡 日本近代洋楽史序説』 刀水書房 1993年
- ・帘功「カトリックの典礼音楽の歴史と現状」『礼拝と音楽』第18号 日本基督教団出版局 1978年
- ・日本キリスト教大辞典 教文館 1988年
- ・新カトリック大辞典 研究社 1998年
- ・帘功編 「典礼音楽小辞典」 カトリック北浜教会 1990年
- ・典礼憲章 中央出版社 1968年
- ・カトリック新聞 中央出版社 1957年1501号, 1518号, 1528号, 1960年1635号
- ・五野井隆史著『日本キリスト教史』 吉川広文館